

---

# 雪玉

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪玉

### 【Nコード】

N9833E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

冬の中学校。中々素直になれない女の子が取った方法とは。告白の方法は一つとは、ストレートだけとは限りません。

## 第一章

雪玉

「おい、降ってきたぞ！」

「やったな、おい！」

冬の寒い日のことだった。街に雪が降ってきた。

子供達はそれを見てもうはしゃいでいた。小学生だけでなく中学生もそれは同じで皆空から降って来るその白いものを見てもう有頂天だった。

「積もるかな」

「積もるよ」

次にこんな話をする。

「絶対積もるさ。街は真っ白になるぜ」

「銀世界だよな」

普段は暖かく雪の降らない場所だ。だから余計にはしゃいでいた。

「となればだ。後は」

「かまくら作るうぜ」

誰かが楽しそうに言ってきた。

「かまくら。皆でな」

「ああ、それいいな」

「積もればだけれどな」

「積もるさ」

もうそれは殆ど決まっていることだった。笑顔になってさえる。

「完全にな。この調子だと」

「積もるか」

「ああ」

詰襟の男の子達が笑顔で話をしている。窓の向こうの雪を見て掃除もそっこのけだ。

「積もるさ。だから」

「遊ぶか」

「かまらなくてじゃ物足りないぜ。櫛もあるぜ」

「そうだよな。それも出して」

「それに何より」

話が弾む。もうこれからのことを考えて楽しくないのだ。

そのうえで。また誰かが言った。

「雪合戦しようぜ」

「そうそう、それだよな」

「折角雪が降ったんだしな」

雪合戦の話も出た。雪が積もればまず何をするか、それを考えればこれが話に出るのは当然の帰結であると言えた。かまくらや櫛と並んで。

「それだよな、やっぱり」

「明日の昼休み皆でしようぜ」

「雪合戦か」

「皆で二つに分かれてな」

男の子達の中でもとりわけ元気のいい子が言う。少し小柄だが活発そうな顔立ちをしていて黒く短く刈った髪が実によく似合っている。その彼が言うのだった。

「やるうぜ。楽しくな」

「そうだな。男も女も入れてな」

「やるか、皆で」

「ああ、皆でな」

そんな話をしている。やはり掃除をせずに。しかしここで今まで自分達だけでその掃除をやっていたセーラー服の女の子達から遂にといった感じでクレームが来たのだった。

「こら、あんた達！」

「いい加減にしなさい」

「おっと、雷が」

「雪なのに落ちてきたよ」

「雷じゃないわよ」

彼女達は口を尖らせて彼等を叱る。その光景はさながら家事を手伝おうとしない亭主を叱る女房だ。もうそんな姿になっていたのだ。つた。

「早く掃除しないと終わらないでしょ」

「雪はいいから後、後」

「ちえつ、厳しいなあ」

「ちゃんとやってるのにさ」

「ちゃんとやってるのならばいい」

ここで女の子達の中でとりわけ厳しそうな、黒い髪の毛を左右で二つに編んで分けている女の子がゴミ箱を右手に持って差し出してきた。きつい感じだが目鼻立ちはかなりしっかりしている。

「捨ててきて」

「雪の中をかよ」

「雪が好きなんですよ？それに誰かが捨てに行かないといけないじゃない」

彼女はこう男の子達に対して言う。随分と厳しい口調だ。声は高く澄んだものであるがそれが余計に厳しさを際立たせもしていた。

「だからよ。捨てて来て」

「わかったよ。じゃあ」

「ジャンケンでな」

「三日月君」

だが彼女はここで殺気一番騒いでいたその黒髪を短く刈った少年に声をかけてきた。

「御願いな」

「おっ、数馬御指名」

「やっぱりそうだったな」

「ちえつ、俺かよ」

その少年三日月数馬は周りの煽りもあって口を尖らせて言った。

「またかよ。おい葉山」

「何？」

葉山と呼ばれたその少女は平然として数馬に言葉を返す。視線も傲然としたものだった。

「俺ばかり言っただけじゃないか？」

「気のせいよ」

「そうか？」

「大体三日月君いつもお掃除とか真面目にしていないうじゃない」  
そのうえでこう数馬に言ってきた。

「だからよ。いつも好き勝手ばかりやって」

「ちえっ、反論できないところが悔しいな」

自覚があるのだった。だから反論できなかったのだ。

「まあいいさ。捨てに行けばいいんだろ」

「ええ、御願い」

「わかったよ。じゃあ」

そのゴミ箱を受け取る。しかしその時に二人の手と手が触れて。何故か彼女の目が動いて顔が微かに赤くなったのだった。誰も気付いていなかったが。

「行って来るな」

「走って滑らないようにね」

駆けていく数馬に対してまた言った。

「危ないから」

「わかってるよ。そんなこと」

「わかっていたら廊下は駆けないの」

また言うのだった。

「わかってないじゃない」

「ちえっ、五月蠅いな」

そうは言いながらも駆けるのを止める数馬だった。速足だが廊下を進んでそのまま姿を消す。少女はそんな彼を見て顰めさせた顔で溜息をつくのだった。

「全く。世話が焼けるんだから」

「そうよね、全く」

「あれでやんちゃじゃなかったらね」

周りの女の子達も口々に姿を消した数馬の後姿の残像を見ながら  
言い合う。

「結構頭もいいしスポーツもできるし」

「結構気がつくしね」

「そうそう、裏表がないのがいいのよ」

実は人間としてはそんなに評判の悪くない数馬だった。

「明るいしね。顔だって悪くないし」

「それでどうしてねえ」

「まあそれがあいつだよな」

「だよな」

男の子達も女の子達のその話に入る。ただし今度はちゃんと掃除  
をしながらだ。

## 第二章

「あいつつてな。あれで結構優しいしな」

「いい奴だよな」

「いい奴はいい奴よね」

「そうよね」

女の子達も彼等の言葉に頷いてそれを認める。

「けれどねえ」

「何でああなのかしら」

しかし悪いところも言うのだった。

「何やってもいい加減なところあるし」

「ちゃらんぽらんなのよ」

「その点はあれよね」

ここでさつき数馬にゴミ箱を渡したその少女に顔を向けて言う。

「恵理香とは全然違うわね」

「正反対ね」

「ああいう子って見ていて困るのよ」

その少女葉山恵理香は口を尖らせて一同に言ってきた。見れば制服の着こなしも完璧だ。何処も崩れてはいない。埃一つ付いてはいない。

「放っておけないのよ」

「放っておけないって何か」

「お姉さんみたいなこと言うわね」

「あっ」

周りからそう言われて恵理香は不意に声をあげた。

「どうしたの、急に声あげて」

「何かあったの？」

「いえ、別に」

しかしそれはすぐに引っ込めるのだった。顔を少し赤らめさせて。

「何でもないわ」

「そうなの。驚いたわよ」

「驚いたの。御免なさい」

「不意に声なんてあげるから」

「ねえ」

皆そう言い合う。

「けれど明日は本当に積もりそうね」

「そうね」

彼女達も雪の話をする。窓には相変わらず雪が降っている。廊下の窓から見える雪は静かでしんしんと降っている。その雪を見ての話だった。

「それはね」

「雪合戦かあ」

やはりその話もするのだった。その中でふと一人が言った。

「そういえばね」

「どうしたの？」

「私のお姉ちゃんから聞いた話だけれど」

そう前置きしてから話すのだった。

「お姉ちゃんのお友達で。好きな子がいてね」

「ええ」

「その子にどうしても告白できなくて悩んでいて」

「それでどうしたの？」

恋路のことになるとどうしても気になる年頃だ。皆それを聞かすにはいられなかった。それで必死に話を聞くのだった。彼女の周囲に集まる。その中には恵理香もいる。彼女はこっそりといった感じで話の中に入っていたのだった。

「雪合戦の時にね。したらしいのよ」

「告白を？」

「そうなの」

そう話す。

「あれ、けれど」

「そうよね」

しかしここで皆気付いた。ある矛盾に。

「その人告白できなかったのよね」

「そうよね、どうしてもって」

今の話を思い出して話すのだった。

「それでどうして告白なんかしたの？」

「どうやって」

「それよ。雪合戦よ」

彼女は言う。

「だからね。雪玉の中に入れていたのよ」

「ラブレターを」

「そう、それをぶつけて告白したのよ」

「成程」

「そういう手段があったのね」

皆それを聞いて納得するのだった。それならば何の問題もない。

方法は幾らでもあるのだった。そのことに気付いて納得することし

きりだった。恵理香も。

「それならできるわね」

「中々いい方法よね」

「皆そう思うでしょ」

話した彼女もにこりと笑って皆に告げる。やはり恵理香もそれに加わっている。

「だからね。そうして」

「いい方法ね」

「それもかなり」

「だから明日はチャンスかもよ」

彼女はそれにこりとした笑顔のまままた答えた。

「告白したい人にはね」

「そうね、確かに」

「それなら」

「ええ、本当にね」

恵理香はその話を聞いて頷くことしきりだった。見れば彼女が一番強く頷いていた。

「それで行けば。確かに」

「確かにつて葉山さん」

「どうしたの？」

「えっ、どうしたのって？」

恵理香は皆に話を振られてまた顔を赤らめさせた。

「急に頷いて」

「何か急に」

「あっ、何でもないわ」

またこう言つて誤魔化す。やはりここでもそれは同じだった。

「ただ。そういうやり方があるんだって」

「そうよね。面白いやり方よね」

「確かにね。それだとまず」

「そうでしょ。それで見事成功したらしいわ」

話していたその彼女もここで笑顔で皆に語る。

「完璧にね」

「そうなの。成功したの」

「じゃあ私もやってみようかしら」

「つてあんたもう彼氏いるじゃない」

「その彼氏によ。もっとプッシュしてね」

女の子達も次第に掃除そっちのけで話すようになった。だが恵理香はそれを今度は静かに聞いていた。聞いているうちに彼女は。心の中であることを決意したのだった。

### 第三章

その日彼女は家に帰るとまず自分の部屋の机に座ってあるものを書いた。それは手紙だった。一時間程で書きその中身を見てまずは満足する顔になった。

「まずはこれでいいわね」

手紙を見つつ言う。そして今度は窓の外を見る。もう暗くなっているその空に雪が降り続けている。外の世界は既に雪が積もっている。

それを見てまた思うのだった。

「この調子なら絶対にいけるわ」

雪を見て強い決意の顔で頷くのだった。それで決まりだった。そして次の日。見事に銀化粧をした学校の中で皆はしゃいでいる。めいめで櫓に乗ったりかまくらを作ったりしている。その中には当然ながら数馬もいる。数馬はクラスの皆の音頭を取って雪合戦をしようとしている。

「じゃあ皆やるぜ」

「やっぱりこれか」

「好きだねえ」

「雪ついたらこれしかないだろ」

数馬は皆に対して言い返す。しかしその顔は満面の笑みだ。

「雪合戦だよ、やっぱりな」

「そうか」

「ああ。こんな日しかできないからな」

こう言ってもう手袋をはめる。雪合戦によく合うビニールの手袋をだ。

「それでだよ」

「わかった。じゃあな」

「まあどのみちやるつもりだったけれどな」

「女組もそれでいいよな」

「何よ、女組って言い方」

女の子達もいる。彼女達は今の数馬の言葉に少しつつかった。

「少しは考えて言いなさいよ」

「何処の大昔の不良漫画よ」

「不良漫画だったか？」

数馬は今の彼女達の言葉に突っ込みを入れた。

「ジャニーズのグループの名前だったんだけれどな」

「それでも古いわよ」

「私達が生まれる前のグループじゃない」

やはり口が減らない。しかし数馬も同じ位口が減らないのだった。

「いいじゃねえか。じゃあ光源氏でいいか？」

「何処をどうやったらそんな名前になるのよ」

「無理があり過ぎよ」

「何だよ、ジャニーズだから出したのによ」

「せめて嵐にならないの？」

数馬に対しての容赦ない突込みが続く。

「随分古い趣味だけれど」

「中学生の趣味じゃないじゃない」

「わかったよ。じゃあしぶガキ隊にとくな」

冗談でこう言ったがこれに対する反論もかなりのものだった。

「センスの欠片もないわね」

「何、そのグループ名」

彼への反論ではなくなっているがそれでも彼に向けられたものになっっていた。

「もうちよつと考えてつけたら？」

「冗談みたいよ」

「文句は向こうに言ってくれよ」

しかしそう言われても彼は平気なものだった。自分のことではな  
いから気楽なのだという事情もあった。そう、彼は気楽なものであ

った。

「まあとにかく。はじめるんだよな」

「だから早くはじめるって」

「ジャンニーズはどうでもいいからよ」

男の子達からの声だった。

「早いうちにな」

「頼むぜ」

「ああ、わかった」

彼等の言葉に頷きあらためて女の子達の方を向いて。問い掛けるのだった。

「じゃあはじめるな」

「了解」

「わかったわ」

「出席番号の偶数と奇数に分かれてやるうぜ」

学級委員長が言ってきた。

「それでいいよな」

「ああ、それでな」

「じゃあ早速」

メンバー分けはそれですぐに終わった。こうしてお互いに分かれて試合開始となった。数馬は奇数で恵理香は偶数だ。彼女にとっては実に都合のいいことだった。

「丁度いいわね」

向かい側に数馬を見ながら微笑んでいる。一人こっそりと。

「それじゃあ」

そのうえで懐から昨日書いた手紙を出した。すぐにそれを雪玉に入れて包み込む。雪玉は何度も何度も両手で押してそう簡単には崩れて投げている最中に投げている手紙が出ないようにした。玉は力チコチにまでなりそれを見て満足した笑みを浮かべる。これだけで準備万端整ったのだった。

後は早速速射砲の様に雪を投げ続けている数馬に顔を向けた。そ

のうえで彼の名を呼んだ。

「三日月君！」

「んっ、葉山!？」

「受けなさい！」

そう言つて雪玉を投げたのだった。早速。

雪玉は一直線に飛ぶ。いいスピードと球筋だった。どうやら彼女の運動神経は中々のものだ。その速さは数馬といえど不意ではかわせるものではなかった。

雪玉は見事彼の額に命中したクリティカルだった。

「やった！」

「葉山さんやるね！」

偶数チームは恵理香が見事数馬に命中させたのを見て歓声をあげる。言うまでもなく彼が偶数チームにとって一番の脅威だったからだ。

その彼に命中させた。恵理香はスターになった。ところが彼女にとってそれはどうでもいいことだった。じつと数馬を見ているのだった。

「さて、どうかしら」

雪玉が当たった彼の反応を見ていたのだ。雪玉はさっきので割れて中身が彼に見える筈だ。話はそれからだ。どうなるのか、じつと見ていた。

ところがであった。彼女の予想通りには進まなかった。それどころか。

「うっ……」

「お、おい三日月！」

「どうしたの!？」

額にその雪玉の直撃を受けた数馬は背中からゆっくりと崩れ落ちたのだった。慌てて皆が駆け寄る。恵理香は崩れ落ち倒れてしまった彼を見て呆然としてしまった。

## 第四章

「えっ、どっして」

「ちよつと葉山さん」

「やり過ぎよ」

ここで同じチームの女の子達が惠理香のところに来て言った。

「やり過ぎって？」

「だから。雪玉硬くし過ぎよ」

「そりゃそんなことしたら駄目よ」

「硬くって」

「だから」

そのうちの一人がまだ話がわかっていない惠理香に対して説明する。

「雪よ。あまり硬くしたら」

「ええ」

「氷の玉になっちゃうじゃない」

「あっ」

言われてやっとそのことを思い出した。そうなのだ。雪玉はあまりにも硬くさせるとそれこそ氷になってしまう。当たり前のことだがそのことを思い出したのだった。

「そうよね、そっついえば」

「確かに色々ある相手だし気持ちはわかるけれど」

「やり過ぎよ、さっきのは」

「あの、その」

何か責められだして戸惑う。本人にそんなつもりはなかったのだから尚更だった。

「私は」

「とにかく。保健室に連れて行きますよ」

「そうね。大丈夫だと思うけれど」

「私が連れて行くわ」

恵理香は咄嗟に自分で名乗り出た。

「葉山さんが？」

「ええ、私がぶつけたんだし」

こう皆に答えたらうえでの名乗りだった。

「だから余計にね。それでいいわよね」

「ええ、それじゃあ御願い」

「一人で大丈夫？」

「大丈夫だから」

その質問にはすぐにこう答えた。

「安心して。一人でいけるわ」

「そう。それじゃあ」

「御願いするわね」

「ええ」

こうして他ならぬ彼女自身が倒れる数馬の肩を担いだ。その時に落ちていた雪玉に気付いた。彼女が投げたその雪玉であった。

「あっ」

それに気付くとふと思うことがあった。それで彼女は。誰にも気付かれないようにそっとその雪玉を手を取った。そのうえでそれを自分のポケットの中に収めてそのうえで数馬を保健室に連れて行くのだった。男の子の中ではどちらかといえば小柄な彼女は女の子の中では背の高い恵理香よりも背が高かった。恵理香はそのことにコンプレックスめいた、それでいて妙に自分が女の子なのだということを意識しながら保健室に向かうのだった。

数馬が目覚めたのは保健室の白いベッドの中だった。目が覚めると丁度彼の顔を恵理香が覗き込んでいた。

「あれ、葉山」

「よかった、気が付いたのね」

恵理香は彼が目を開けたのを見てほっとした顔で微笑んできた。

「どうなるかと思ったわ」

「俺確かあの時」

「御免なさい、私の投げた雪玉で」

両手を合わせて目を閉じて彼に謝罪するのだった。

「額に直撃して。それで」

「ああ、そうだったよな」

彼女にそれを言われて思い出すのだった。

「俺、葉山の雪玉に当たってそれで」

「保健の先生はショックで倒れただけだって仰ってたわ」

「それだけなんだ」

「怪我はね。それだけよ」

「じゃあ大丈夫だな」

今の恵理香の言葉の意味には全く気付いていなかった。

「それじゃあ暫く休んだら」

「そうね。ただその前に」

「んっ!?!」

「これ」

そう言って彼に差し出したのは。あの雪玉だった。

「あげるわ」

「!?!それって」

「ええ、これあげるわ」

彼に差し出ししながら言葉を続ける。

「中身もね」

「中身って?」

「よかったら。割ってみてくれるかしら」

「これをだよな」

「そうよ、それをね」

言うまでもなく雪玉のことだ。数馬に対して言うのだ。

「御願ひ。開けて」

「開けたら何かあるのか?」

「開けたらわかるから。だからあげる」

「何かよくわからないけれど貰っていいんだよな」

恵理香の真意が掴めないまま応える。やはりわかっているはいない。

「それで」

「ええ、だから」

「わかったよ。じゃあ」

恵理香からその雪玉を受け取った。それから言われるままにその雪玉を開ける。すぐにその中に入ったものに気付いてみている。その間恵理香はじっとして身動き一つしない。当然言葉もない。だが彼がその中身を見終わつたと見ると。こつ尋ねてきた。

「……いいかしら」

「まさかとは思ったけれどな」

数馬は苦笑いになっていた。恵理香の方を見て笑っている。

「だからか。それでわざわざ」

「ええ。話を聞いて」

あの雪玉の話だ。

「それで私もやってみたの。こつした告白ならいいかなって」

「成程な。そうだったんだ」

「口では中々言えないから」

顔を俯けさせている。恥かしがっているのがわかる。

「だから。こつして」

「わかったよ。そういうわけだったんだ」

「それで。返事は？」

あらためてそれを尋ねてきた。

「返事はどうかしら。駄目？やっぱり」

「いや、いいけど」

あさりとではあったが恵理香にとっては望ましい返答だった。

「葉山がそれでいいっていうんなら」

「いいのね、本当に」

「ああ、こんな時には誰だって嘘はつかないさ」

笑って顔をあげてきた恵理香に対して告げる。

「だからさ。これからあらためて宜しくね」

「ええ、ええ」

恵理香は満面に笑顔になっていた。その笑顔で数馬の言葉に心えるのであった。

「こちらこそ。あらためて」

「ああ。けれどな」

「何？」

「あの雪玉はもう止めてくれよ」

また苦笑いになって彼女に告げてきた。

「氷そのものの雪玉はな。いいな」

「あつ、御免なさい」

「本気で痛かったからな」

それを彼女に対して言う。

「だから今度からはな。それはなしでな」

「わかったわ。それじゃあ」

「それだけ頼むぜ。じゃああらためて」

「宜しく」

「こちらこそな」

最後は純粹な笑顔でベッドとその側で笑みを浮かべ合う。窓の外ではまた雪が降りだしていた。外は寒いが二人は暖かい。その中で笑みを浮かべ合うのだった。穏やかで優しく、暖かい笑みを。雪玉がそれで溶けてしまいそうになる笑みで。

雪玉 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9833e/>

---

雪玉

2010年10月8日15時15分発行